

ゴマダラチョウに会いに 赤塚城址にでかけませんか



羽化したばかりのゴマダラチョウ 2003年5月10日

ゴマダラチョウはエノキの葉を食べるきれいなチョウです。赤塚城址では日当たりのよい城址の広場に面して大きなエノキが何本もあります。

1997年1月、赤塚城址で釣巻さんの指導ではじめてゴマダラチョウの冬越しの幼虫探しをしたときの感動は今も忘れられません。そのとき私はエノキの見分けもつきませんでした。

ゴマダラチョウは、冬になると木から下りてきて幼虫のまま、枯れ葉にくっついて春を待ちます。冬の寒い日、エノキの根元の落ち葉を1枚、1枚めくってゴマダラチョウの幼虫を探すのです。ちょうど落としたコンタクトレンズを探すような格好で、はいつくばって、正直なところ根気のいる調査です。幼虫がぞろぞろ出てくるわけでもない。そのときは10人ほどが散らばって幼虫を探して見つかったのは3匹位でした。しかし枯れ葉の裏にしっかりくっついて春を待つゴマダラチョウの幼虫は、健気で、思わず応援したくなります。考えても見てください、小さな虫が、高いエノキの枝から下りてきて、冬の間枯れ葉にしがみついて何も食べずに過ごし、春になったら飲まず食わずのままで、また高い梢までのぼって行くのです。えらいですねえ。

木の根元に落ち葉がとどまっていることが重要です。根元がさっぱりしていると、落ち葉は風に飛ばされてしまうし、また草刈りをしたり、落ち葉を掃除すると…いずれも幼虫は一巻の終わりです。

それまで、落ち葉を集めて腐葉土にし、「カブトムシのゆりかごを作ろう」なんて単純な認識しかなかった私には、枯れ葉を利用する昆虫がいることに驚きました。

冬越しの幼虫は枯葉色ですが、春になってエノキの葉っぱを食べているゴマダラチョウは、新芽の色から新緑のきれいな緑色で、やがて、サナギになって、羽化します。オオムラサキの仲間なので幼虫の姿もよく似ているそうです。私はオオムラサキの幼虫も成虫も見ましたがありませんが、ゴマダラチョウの成虫もとてもきれいです。



幼虫 2003年4月23日



サナギ 2003年5月5日

ゴマダラチョウを観察するには、まず幼虫の食樹であるエノキの木を探します。エノキの葉っぱは右図のような形をしていて、左右非対称(少しゆがんでいる)、葉の下半分(軸の方)にはギザギザがない、葉脈が元のほうで3本に分かれている、ことが特徴です。大木のエノキでは葉っぱにいる幼虫を探すことは不可能です。が、1mくらいの若いエノキの木はあちこちで見つかります。エノキの実が野鳥の好物で、糞と一緒に種を落としているからです。



その1m内外の若いエノキが多いところが日当たりのよい赤塚城址のバッタ広場です。バッタ広場とは草原のピオトープの愛称?ですが、ちょうど目の高さに枝があって、虫を探しやすい場所なのです。

草原としての管理上、2003年4月に1m以上のエノキの若木を切ったとき、枝にはたくさんのゴマダラチョウや他の幼虫がついていました。幼虫をエノキの大木の根元に放しましたが、やれやれと、もう一度木に登ってくれたでしょう。

なぜ幼虫が春先ここに多いのでしょうか。卵を産むとき、エサの葉が十分にあって、また木が低くて登り降りするエネルギーが少なくてすむ場所を選んだかどうかはわかりませんが、草がぼうぼうなので、安全に冬越しでき、幼虫の生存率も高いはずです。

私はこのバッタ広場で、ゴマダラチョウの羽化に出会い、幼虫に出会い、サナギに出会いました。今年は、羽化したゴマダラチョウが産んだ卵や、卵からかえったばかりの小さな幼虫を見たいなあ、と思っています。

自然は、「草地」、「樹林地」と明確に区分されたものではない。ここには「樹林の気がある草地」のあいまいな環境のおもしろさがあります。公園の中に、生き物がすみ、私たちも生き物の生活に触れ、共感できる場所があることは、貴重なことではないでしょうか。

最後をお願いします。昆虫は採集して絶滅するものではない、昆虫のいる環境を破壊するからなくなるのだ、と言われます。それは正しいと思います。この狭いバッタ広場でも中に入ってもいいし、昆虫採集も禁止していません。しかし、です。大勢の子供達に来て、片っ端から捕まえてもって帰ったら、昆虫達にも相当な打撃です。そっと蝶の成長を見守ってくださいようお願いします。(坂本 郁子)